

## 「環境保全型農業とマスメディア報道の課題」

科学ライター 松永 和紀 氏

私の仕事は、イメージと本質の間にある距離を探って本質を多くの人に伝えることです。環境保全型農業を少し離れたところから見ると、いくつか疑問があり、今日は 2 つの話をしていきます。

1 つ目は、現代の農薬、化学肥料の科学的な性質が、生産者、消費者に理解されているかという点です。農薬は悪い、化学肥料は危険だと消費者の誤解を利用して、環境保全型農業を進めた方が一部にいるという印象があります。

2 つ目は、現在の「環境保全型農業」は本当に環境保全になっているのかという点です。イメージで、「環境によい」とされているのではないかと思います。

農薬、化学肥料の科学的に理解されているかという点について、典型的なのはコウノトリ絶滅の話です。新聞、雑誌は、農薬の使用やエサとなる生物の減少などで生息数が減少し、絶滅したという書き方をしました。しかし、実際コウノトリの生息数の推移と農薬使用には時期的にずれがあります。コウノトリは、江戸時代末期まで各地に生息していましたが、明治、大正時代に水田を荒らす害鳥として乱獲されました。1930 年頃には既に、兵庫県に約 100 羽を残すのみとなりました。

一方、一般の農家が農薬を使い始めたのを調べると、戦前はほとんど有機無農薬だったことがわかります。農薬が絶滅の主因ではないのは明らかです。こういうことをメディアは紹介できていません。

農薬のイメージと現実には乖離があります。消費者のイメージは 30~40 年前の農薬の話です。現在の安全性評価の仕組みは非常に厳しいです。また、農薬が省力化、安定生産に大きく貢献したのも事実です。

今の農産物には残留農薬は非常に少ないです。残留基準以下であれば、食べた場合の安全性においては問題がありません。

ただし、農薬にも問題は残っています。環境影響調査は足りません。今まで食の安全に評価が傾きすぎていました。使用する農業者の健康影響評価も不足しています。生産者の農薬摂取量が消費者に比べてうんと多いにもかかわらず、職業だから仕方ないと整理されてきました。

化学肥料にも誤解があります。化学肥料がなかった時代に肥料不足でどれほど農家が苦

労したかを考えなければいけません。化学肥料のおかげで土壌が肥沃になりました。有機質肥料・堆肥も大量投入すれば環境影響が大きいです。消費者にはなかなか理解されていません。

2つ目の疑問について、環境保全型農業で、環境が保全されたというデータをあまり見ません。環境保全型農業の定義を参照すると、生産者も消費者も、土づくりと化学肥料削減・化学農薬削減という理解になっています。

OECD の環境影響指標を見ると、土地の利用方法や養分、農薬やエネルギーなど様々です。トータルで環境への影響を検討しています。日本の環境保全型農業を見ると、偏りがあると思います。

事例の1つは、紙マルチ除草に関する茨城大の研究成果です。紙マルチ農家は有機 JAS 認証をとっており、世間的には一番環境にはいいとされる農家でしょう。しかし、茨城大の調査によれば、大量の温室効果ガス（CO<sub>2</sub>）を排出していました。製紙業は、水もエネルギーも CO<sub>2</sub> も排出するという産業です。農家には紙しか見えてないので、除草剤を使わない栽培は環境にいいと思っています。農業の環境負荷は、表面的では判断できません。

もうひとつの事例は、訪問したりんご園の話です。特別栽培になって、除草剤を3回から1回に減らしました。除草剤1回散布の代わりに機械除草を3回ほどやるというのです。機械除草では化石燃料を使います。除草剤を1回使うのとどちらが環境によいかわかりません。環境を守ると考えたとき、温室効果ガスを出さない、エネルギーを使わないことも重要です。どこかで優先順位をつける必要があります。

これからは、LCA の視点が極めて重要です。ライフサイクルアセスメントの略で、製品、サービスなどを対象に、原材料調達や輸送、生産、流通から廃棄・リサイクルまでの全過程（ライフサイクル）全体を通して、環境負荷を算定する手法です。農薬・肥料・土だけでなく、エネルギーや生物多様性、水などについても検討して、トータルで環境影響を検討したほうがよいと思います。「木を見て森を見ず」で環境に良い/悪いを判断しないでほしいと思います。

農地の広さ、気候、周辺環境。作物、など、農家によって条件は様々です。それぞれ自分の場所で、農家自身が考えていただくしかないと思います。

この複雑系をマスメディアは伝えていません。マスメディアの問題点の1つは、専門知識がない、あるいは調べないことです。本当に多くの記者が知らないままに表面的な取材

で書いています。センセーショナルが最優先されることも問題です。マスメディアは結局売れないとダメなので、大衆受けする人が興味を引くような内容を公表しようとしています。自分たちのお得になるようなニュースを選んでいきます。

一般市民の方には、情報を分析する力を持つと申し上げています。報道には偏見が入っています。インターネットで調べたり、食の現場を見に行ったりしてほしいと思います。「農薬を使わないから安全で、良い」ではなく、農薬を使わなかったとき現場で何をしているか見てほしいのです。消費者と生産者をなるべく近づけて適正な情報を伝えたいと思います。

最後に、コープ九州事業連合の事例を紹介します。2008年に産直品の土づくりの基準から「化学肥料5割削減」を外しました。以前は、「化学肥料5割削減」という制限で、有機質肥料を大量に使っていました。有機質肥料は化学肥料に比べ分解が遅く季節によっては使いにくく量の調節もしづらかったそうです。そのため、生産者から化学肥料をもう少し使えたら収量を楽に上げられるという意見が多く出てきました。

今は、5割という数字を外した代わりに、土壌診断による処方を実施し、健康に作物が育つ条件を満たした科学的な施肥の実施を産地に推奨しています。土づくりの基準の中に「生協では地域および国内農協の持続性と、環境負荷を低減させる農業を生産者と一緒に目指します」と書かれています。

科学的な栽培が重要です。化学肥料という選択肢も含め、臨機応変にその土地にあわせるのが本当の環境保全型農業の農家だと思います。

今まで環境保全型農業を行ってきた経験を踏まえ、次のステップに踏み出すときです。本当の環境保全型農業のために、自分の土地で何ができるかを考えていただけたらと思います。